Short ショートコメント ★★★

アシスタント

2019年／アメリカ映画
配給：サンリスフィルム／87分

2023（令和5）年7月6日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　２０２３－８０

監督・脚本・製作・共同編集：キティ・グリーン
出演：ジュリア・ガーナー／マシュー・マクファディン／マッケンジー・リー

みどころ

『スキャンダル』（１９年）の大ヒットで、「FOXニュース」の絶対的権力者だったハーヴェイ・ワインスタイン氏のセクハラぶりが世界中に露呈し、続いて日本でも、ジャニーズ事務所の絶対的権力者であったジャニー喜多川氏の醜聞が明るみに！

そんな流れに沿って（？）、オーストラリア生まれの若手女性監督が自らの体験を踏まえて（？）、巨大映画制作会社で夢いっぱいに働くプロデューサー志望の若き女性アシスタントに、不平不満、問題提起を託することに・・・。

全編にわたって出ずっぱりのヒロインに、笑顔は一切なし！徹頭徹尾“不満顔”“不安顔”だが、その原因は一体どこに？弁護士歴４９年の私に言わせれば、ワインスタイン氏もジャニー喜多川氏も犯罪を犯したのだから社会的非難は当然だが、本作の“会長”は何か犯罪を犯したの？

そうでないのなら、なぜここまで社会的非難を浴びなければならないの？ヘソまがりの私には、そこがイマイチ。『スキャンダル』とは問題の本質が異なるのでは・・・？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

◆ニューヨークタイムズが、視聴率トップを誇るメディア「FOXニュース」におけるハーヴェイ・ワインスタイン氏のセクハラ問題を告発したのは２０１７年１０月。それをシャーリーズ・セロン、ニコール・キッドマン、マーゴット・ロビーという、ハリウッドの３大美人女優の共演で映画化した『スキャンダル』（１９年）（『シネマ４６』５０頁）はメチャ面白い映画だった。シャーリーズ・セロンが主演した『スタンドアップ』（０５年）（『シネマ９』１８６頁）も面白かったが、ニュースより女性キャスターの脚の見せ方の方がもっと大事というご時世（？）では、同作はまさに必見！

しかして、１９８４年にオーストラリアで生まれた女性監督、キティ・グリーンが監督・脚本・製作・共同編集した本作は２０１９年に公開されたが、幼い頃からアートのある環

境で育った彼女自身の体験を踏まえて脚本を書いているだけに、本作の主人公ジェーン（ジュリア・ガーナー）はキティ・グリーン監督とまるで瓜二つ・・・？そうなるとドキュメンタリー映画になってしまうので、彼女の長編フィクション初となる本作では、監督の持つすべての不平不満（？）を、ジェーンの不満そうな表情に全て委ねることに・・・？

◆私はワインスタイン氏を擁護するつもりはないし、近時日本で大きな話題を呼んだ、ジャニーズ事務所のジャニー喜多川氏を擁護するつもりもない。しかし、男は所詮若い女が好きな動物。したがって、地位と権力と金が手に入れば「俺は何でもできる！」という錯覚が生まれ、若い女に手を出したくなる気持ちは私も十分理解できる。中国の皇帝や日本のお殿様ならそれも許されていたが、近代民主主義国家は平等の精神の下に成り立っているから、そこではそれは無理。その上、マスコミやSNSが高度に発達しているから、ちょっとヤバイことがあればすぐに・・・。

他方、『スキャンダル』ではメディア王国の独裁者の横暴ぶりが際立っていたが、本作ではアシスタントとして就職し、２人の同僚の男性アシスタントと共に希望に胸を膨らませて朝早くから夜遅くまで働いているジェーンに対して、“会長”から『スキャンダル』で見た新人ニュースキャスター（マーゴット・ロビー）のような圧力がかけられるわけではない。それは、後日ジェーンが相談に行くことになる人事部の幹部社員、ウィルコック（マシュー・マクファディン）が言うように、「心配いらないよ。君は会長に気に入られるタイプじゃないから」だが、それって若い女性にとっては褒め言葉？それとも屈辱？

ジェーンは入社して２ヶ月の新米アシスタントだから、私に言わせれば、先輩たちのために“雑用”をすべてこなして当たり前。政治家（の卵）だって、いわゆる“雑巾がけ”をこなす中で少しずつ認められていくのだから。私だって、弁護士になりたての頃は、○○、△△、等々の雑用は何でもこなしていたものだ。本作でも、別段ジェーンがそれを嫌がっているわけではないが、どうもキティ・グリーン監督の演出では、そのこと自体が“搾取構造”になっていると主張したいらしい。しかし、私に言わせればそんな演出、そんな脚本は少し無理筋では・・・？

◆本作のパンフレットはＡ4版で７０ページもあり、定価も９９０円と高い。それはイントロダクション、ストーリー紹介等々の他、エッセイが５本、レビューが３本も掲載されているから。そして当然ながら、そのどれを読んでも、本作とジェーンに好意的だ。そして、本作のスクリーン上には全く姿を見せない巨大（？）映画制作会社の“会長”はもとより、人事部の幹部社員で、相談にやってきたジェーンに丁寧に対応するウィルコックも“加害者”だと断じている。さらに、ジェーンの同僚である２人の男性アシスタント（ノア・ロビンズ／ジョン・オルシーニ）すら、社内の問題点を見て見ぬふりをしている存在だから、『ハンナ・アーレント』（１２年）（『シネマ３２』２１５頁）にみた「悪の凡庸さ」

と同じ存在の“加害者”だと評価している。

しかし、弁護士歴５０年近くになる私には、本作の“会長”がお仕事の合間に見せる“若い女性に対するチョッカイ（?）”は、どこの世界でもあるものとしか言いようがない。したがって、そのことを妻が責めるのは別として、社会が一斉に非難すべきこととは到底思えない。会長室に若い女を連れ込むことは良いことではないし、推奨できることではないが、そうかと言ってこっそりそれをすることが、そんなに社会的に非難されるべきことなの？もちろん、それが犯罪行為になれば別だが、合意の上であれば、そこに大金の授受があったとしても、ほとんどは止むを得ないのでは？

本作を鑑賞した７４歳の老弁護士たる私の見解はそうだから、多くの非難を浴びることを覚悟の上で、あえてここに書いておきたい。

◆本作では全編にわたって、将来映画プロデューサーになる夢を持って、今は新人アシスタントとして懸命に働いている、真面目で優秀な女性ジェーンの姿が描かれる。しかし、その中で彼女が腹の底から笑った顔を見せることは一度もなく、８７分間ずっと不満顔、心配顔のままだ。

本作中盤に彼女を苛つかせるのは、仕事上の問題点だけではなく、第１にアイダホからやってきた新人アシスタント、シエナ（クリスティン・フロセス）の扱い方、第２に自ら製作した DVD を売り込みに来た監督志望の若い女性、ルビー（マッケンジー・リー）の扱い方だ。彼女たちの来訪はすべて会長からの直接指示だから、言われた通り処理するしかないが、ホテルの手配は一体何のため？さらに、ひょっとしてこんな“バカ女”に私のアシスタントの地位が奪われることがあるの？

ジェーンのそんな心配はごもっともだが、そんな心配は映画業界だけでなく、どこの業界にもあるはずだ。また、本作に見る“会長”は、会長室に残していたイヤリングや毎日飲んでいる怪しげなアンプル等々によれば、特別女好きな“性豪”なのかもしれないが、それは会長個人のキャラの問題だ。したがって、深夜会長室に電気が灯り、女の影がちらついたとしても、ジェーンがそれをダイナーの座席から観察する必要は全くないはずだ。

ジェーンの丸１日の働き方を描いた本作のラストを見ると、さてジェーンは明日も出社して働くの？それとも、静かに辞表を提出するの？そのどちらかは知らないが、本作がヘソ曲がりの私が期待したほどの作品でなかったことは実に残念！

２０２３（令和５）年７月７日記